

思い起こして

[聖書] ユダの手紙 1:1~5

- 1:1 イエス・キリストのしもべ、ヤコブの兄弟ユダから、父なる神にあって愛され、イエス・キリストによって守られている、召された方々へ。
- 1:2 あわれみと平安と愛が、あなたがたにますます豊かに与えられますように。
- 1:3 愛する者たち。私たちがともにあずかっている救いについて、私はあなたがたに手紙を書こうと心から願っていましたが、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。
- 1:4 それは、ある者たちが忍び込んできたからです。彼らは不敬虔な者たちで、私たちの神の恵みを放縱に変え、唯一の支配者であり私たちの主であるイエス・キリストを否定しているのです。以下のようなさばきにあうと昔から記されています。
- 1:5 あなたがたはすべてのことをよく知っていますが、思い起こしてほしいのです。イエスは民をエジプトの地から救い出しましたが、その後、信じなかった者たちを滅ぼされました。

[導入]

みなさん、おはようございます。取手聖書教会牧師の井上聡と申します。何だ、そんなこと知ってるよ、という方もたくさんいらっしゃるわけですが、もちろんはじめましてという方も確実にいらっしゃるだろうと思います。

私はこの土浦めぐみ教会で生まれ育ちまして、つい3年前まで、めぐみ教会スタッフの一人として奉仕をさせていただきました。今日は、このように教会創立72周年の記念礼拝にお招きいただきましたことを本当に嬉しく思います。

しかし、みなさんにあらかじめお伝えしておきたい事があります。それは3年の間に私も確実に年を取ったということであります。そんなことを言いますとモーセ会、ナオミ会のみなさんに叱られてしまいそうですが、でも私なりに年を重ねた自覚を十分に持っているのです。

その証拠にみなさんのお名前がなかなか出て来ない可能性がとても高いのです。お顔は覚えている。なのに名前が出て来ない。年と共に記憶の引き出しが開きにくくなっていく。ですから、名前がすぐに出て来ない場合はご容赦いただきたいのです。

今日は「思い起こして」と題して、みことばを語らせていただきます。私もみなさんの顔と名前を思い起こして、としっかり自分に言い聞かせながら、みことばを語りたいと思います。ひと言、お祈りさせていただきます。

[祈り]

神様。愛する土浦めぐみ教会の皆さんと、またこうして共に礼拝出来ますことを本当に感謝いたします。教会創立 72 周年の記念礼拝です。主がめぐみ教会に注がれた数多くの恵みを数えつつ、あなたの御名を賛美し、共に感謝を献げることが出来ますように。私たちの救い主、主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。アーメン。

[教会の歴史を作る者]

土浦めぐみ教会は今年、創立 72 周年を迎えました。また同時にここ上高津の地において献堂 40 周年の記念すべき年を迎えることになるわけです。献堂 40 年の記念誌をいま作っているということも伺っています。とても楽しみです。

実は取手聖書教会も、今年創立 60 周年の年を迎えまして、同じように記念誌の作成を始めているところなのです。記念誌というのは教会の歴史を記録するものであります。そして大切なことは、今日ここにいらっしゃるみなさんお一人お一人がめぐみ教会の歴史を作っているということでもあります。

土浦めぐみ教会のめぐみ教会の記念誌は代々「途上」という名前が付けられてきました。一番初めの途上は教会開拓 20 年を記念しまして 1974 年に発行されたものです。

その記念誌の中に実は、私の名前が登場するのです。最初の途上の終わりの方に年表が載せられています。その年表の中に 1967 年 9 月 7 日 誕生・井上聡と出てくるのであります。

「何だ、生まれただけか」とは言わないでください。記念誌に名前が載せられている。すなわち、それは井上聡という人間が土浦めぐみ教会の歴史を作る者の一人として数えられたということでもあります。

私だけではありません。ここにいらっしゃるみなさんお一人お一人が、めぐみ教会の歴史を作っておられるのです。あなたの名前が刻まれる。そこに教会の歴史が作られていく。それは間違いのない事実なのです。

週報や月報に、あなたの名前が記されたことがある。つきごよみや奉仕分担表にあなたの名前が載せられたことがある。そこで信仰の証しがなされ、奉仕や祈りが献げられ、そこに教会の歴史が作られていく。

みなさんお一人お一人が、めぐみ教会の歴史である。ですから、今日私が申し上げたいことは過去を振り返り、思い起こしていくことの大切さであります。

[思い起こして]

1:5 あなたがたはすべてのことをよく知っていますが、思い起こしてほしいのです。イエスは民をエジプトの地から救い出しましたが、その後、信じなかった者たちを滅ぼされました。

今日はユダの手紙を開きました。新約聖書に出て来ます手紙には、その手紙が書かれた理由というものが存在します。この手紙を書いたのはユダ。イエス・キリストの後にヨセフとマリヤの間に生まれてきた人物であります。

このユダはおそらく主イエス・キリストの復活の後に救われて初代教会の仲間に加わったのだろう、と言われていています。

そして、このユダが手紙を書こうとした理由は緊急事態が生じたからだと書かれています。この手紙の読者たちの間に信仰の戦いが生じたと言います。そして救われたキリスト者たちを惑わす偽教師が出現したというのです。

間違った教えを説いて、教会の兄弟姉妹を惑わす、偽教師が忍び込んできた。そのような教会の混乱を鎮めるために急ぎの手紙を書く必要が生じた。これがこの手紙の書かれた理由であります。

信仰を守るために、信仰の戦いをしていくために、必要な事は何であったのかそれは思い起こすということでした。

信仰が強められるために何か新しい教えを必要としたのではない。新しい知識や新しい情報が信仰を守るのでもない。あなたがすでに知っていること、すでに経験してきたことをもう一度思い起こすことだとユダは言うのです。

ユダがここで真っ先に取りあげたことは出エジプトの経験でした。神の民イスラエルがエジプトの奴隷状態から解放され、救い出されたこと。イスラエルが神の民としての第一歩を踏み出したこと。それをまず思い起こして欲しい。

すなわち、私たちが信仰を守るために、信仰の戦いを戦うために必要なこと、大切なこと。それは始まりを思い起こすということなのです。

みなさんが土浦めぐみ教会に始めて来られたのは、いつだったのでしょうか。みなさんが土浦めぐみ教会に導かれ、信仰の歩みを始めたのは、いつだったのでしょうか。

土浦めぐみ教会の始まりは今から 72 年前の 1954 年 4 月 11 日。その日に始めて土浦めぐみ教会の礼拝が献げられたと記録されている。この年にウインタース宣教師家族が来日し、最初の礼拝が献げられました。

そんな教会の歴史を知っている人もいらっしゃるでしょうし、また知らない方もいらっしゃることでしょう。でも、大切なことは、その日がなかったら、今のめぐみ教会はなかったということです。そしてめぐみ教会がなかったら、今みなさんは、ここにいないということなのです。

人間の人生というものは、絶えず過去の出来事の上に積み重ねられていくものです。私の人生の始まりはいつからなのか、どこから始まったのか。そして、私の救いの始まりはいつからなのか、どこから始まったのか。

先月、同盟教団の機関誌であります世の光 3 月号に信仰生活 50 年を迎えた方々の名前がリストアップされていました。もちろん、めぐみ教会にも信仰をもってから 50 年という方が何人もいらっしゃいました。

みなさんは信仰を持ってから、救われてから、何年目でしょうか。私たち一人一人に信仰の始まりがあり、救いの始まりがある。それを思い起こすことこそが私たちにとって必要なことであり、大切なことである。まず、そのことを心に深く覚えていきたいと思えます。

[信仰を守る戦い]

1:3 愛する者たち。私たちがともにあずかっている救いについて、私はあなたがたに手紙を書こうと心から願っていましたが、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生まれました。

この 1:3 では、先ほど申しあげたとおり、この手紙が書かれた理由が書かれています。

このユダの手紙は、おそらくユダヤ人キリスト者に宛てて書かれた手紙だろうということが言われています。ユダはまず、この手紙を最初に読んだ読者たちのため、救いについての手紙を書こうとしていました。

私たちがともにあずかっている救いについてと書かれている。みなさんが救いにあずかったのはいつ頃だったのでしょうか。私は高校1年生の夏、15歳の時にこのめぐみ教会で洗礼を受けることが出来ました。

もう何年も前にお話ししたことがあるのですが、私が洗礼を受けた理由は実は脅迫されたからなのです。

「聡、私といっしょに洗礼を受けなさい」

私の姉の脅迫、いやいや、そのひとことで私の洗礼は決まったのです。でも、思い返してみると、それは本当に感謝なことでありました。もし姉から、そう言ってもらわなかったら、いつまで経っても自分で洗礼を受ける決断が出来なかったらと思うからです。

私が洗礼を受けてから、すでに40年が以上経ちました。神様から与った救いは本当にすばらしいものです。救いに与り、献身に導かれ、今はこうして牧師として教会に仕える者とさせていただいています。

けれども40年間、何もなかったというわけではありません。イスラエルの民が荒野での40年に渡る厳しい旅を続けていったように、私にも山あり、谷ありの道のりを導かれてきました。

ユダが書いたように、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のための戦いというものがありました。みなさんもきっと、そのような戦いをこれまで何度も経験して来たのではないのでしょうか。

イスラエルの民が出エジプト以後経験した、40年に渡る荒野の旅は本当に過酷なものでした。食べるものがない、飲む水がない。敵との激しい戦いがあり、また誘惑もあった。

それは思い出すこともはばかれるような、辛い旅でありました。もう二度と通りたくないと思えるような苦しい道のりでありました。けれどもモーセは、その道のりを忘れるなと民に言うのです。

[覚えていなさい]

申命記 8 : 2 あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを歩ませられたすべての道を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試し、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。

めぐみ教会が 40 年前、この上高津の地に新会堂を建てた時、私はまだ高校生でありました。会堂を建てる前、めぐみ教会は土浦市の小松という場所にありました。

私は生まれてからずっと、小松の地にある旧会堂で育ちました。いまのめぐみ教会のように広い駐車場もなければ、自由に遊べるグラウンドもない時代です。

その頃、教会学校が終わると子どもたちの居場所がどこにもなかったのです。それで私はよく教会の隣りにあった、お墓で遊んでいました。

小松の会堂はとても小さな会堂でした。その頃、大人だけで約 120 名ぐらい、いたわけですが、2 回の礼拝をやって、それでもいっぱいになってしまうぐらい手狭になっていました。

それで大きな新会堂を建てようという話が持ち上がりまして、教会の役員さんを中心にいろんな教会を見て回ったんです。教会見学をしてくるたびに大きな模造紙に、その報告が載せられるんです。

「〇〇教会に行って来ました。そこはこんな会堂でした」という報告が出される度に、めぐみ教会の新しい会堂はどんな建物になるんだろう、と子どもなりに夢をふくらませていたものです。

その小松の地から上高津の地へと教会が移転した時、私は本当に驚きました。見渡す限りの田んぼの真ん中に建てられた新会堂。広い駐車場があって、そこではテニスをすることも出来たのです。

「あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを歩ませられたすべての道を覚えていなければならない。」と聖書は語ります。

めぐみ教会がここまで歩んできた道があります。出エジプトでは、荒野で泉が湧きだし、マナという食べものが与えられました。

割れた海を渡り、神のことばである十戒・律法が与えられました。イスラエルの民は不平不満をもらし、神に背を向けるようなこともありました。それでも神は、昼は雲の柱、夜は火の柱となって民を導かれたのです。

めぐみ教会の歩みもいつでも順風満帆とはいかなかったでしょう。それでも尚神さまは、不思議なみわざで教会を守り、みことばによって人を救い、その魂を養ってくださいました。

めぐみ教会に多くの祝福が与えられると同時に苦しいこともありました。試されるようなこともありました。それは「**あなたの心のうちにあるものを知るためであった**」と書かれている。

苦しみや試練というものは、出来れば避けて通りたいと思うものです。しかしそれらを通して、私の心のうちにあるものが明らかにされるのです。私の心の中にあるものが何であるのか、神様は知りたいと願っておられるのです。

人間というのは追い詰められた時にこそ本音が出るものです。つらい、苦しい大変だと思える時、心の中にあるものが出て来るのです。

神様は、私たちが苦しい道のりを通ることによって、つらく困難な状況を経験することを通して、私の心に何があるのかを知ろうとされます。

めぐみ教会は誕生から 72 年、新会堂移転から 40 年となりました。教会が経験した痛み、教会が味わった苦しみ。でも、それらを通して神様は教会を知り、また教会も神を知る機会を得たのであります。

[忘れないで]

詩篇

103:2 わがたましいよ主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

103:3 主はあなたのすべての咎を赦しあなたのすべての病を癒やし

103:4 あなたのいのちを穴から贖われる。

主はあなたに恵みとあわれみの冠をかぶらせ

103:5 あなたの一生を良いもので満ち足らせる。

記憶というものは私たちにとって、とても大切なものです。それは、私たちの人生を支え、助ける力を持っているからであります。

例えば、子どもの頃に経験したことは一生残る、と言われたりします。子どもの時に愛された経験。それは私という存在に価値を与え、私に生きる力を与え助けてくれるのだと言われていてます。また失敗や困難を乗り越えた経験というものは、その人に自信を与え、生きる勇気を与えてくれるものです。

これは信仰をもって生きるという事に、そのままあてはまるものであります。神さまに愛された経験とその記憶。神の家族と共有した思い出や味わった体験そして、どんなつらいことも神の恵みによって乗り越えてきたこと。これらがみなさんにとって大きな力となり、また助けになるということでもあります。

今日私たちは思い起こすことの大切さを始めに心に覚えました。思い起こすということは、すなわち大切なことを忘れないということでもあります。私たちが生まれてからここまで来るのに、神様はどれほどの良いことをしてくださったのでしょうか。

めぐみ教会が誕生してからこれまで、主はどれほど偉大なことをして下さったのでしょうか。それゆえに「主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな」と聖書は、繰り返し私たちに語りかけるのです。

私たちは主の良くしてくださったことを忘れませんし、主ご自身を忘れることなく、思い起こしていくのです。

また私たちが主を忘れないと同時に主も私たちを忘れてはおられないのです。痛みや苦しみの中で、失敗や悲しみの中で、私たちは孤独を味わうことがあります。自分という存在が世界中でたった一人しかいないと思える時があります

けれども主は私を忘れることはありません。どんな状況の中にあっても、どれほど時間が経ったとしても、主は私を覚えていてくださるのです。

土浦めぐみ教会がこれからも主を忘れることなく、主を覚える神の民として、歩まれることを願います。また、めぐみ教会がいつまでも主に覚えられている教会であることを心に留め続けていただきたいと思います。

●祈り

詩篇 103:2

わがたましいよ主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

神様、土浦めぐみ教会の創立 72 周年を、また上高津宣教 40 周年を心から感謝いたします。あなたは 72 年前、この地に宣教師を遣わし、福音の種を蒔き、教会を誕生させてくださいました。

親鳥が小さな雛をかくまうようにして、あなたは教会を御翼の下で守り、養い育ててくださいました。

本日、めぐみ教会の歴史を築いてこられたお一人お一人とともに、この礼拝を献げることが出来る恵みにあずかっています。

どうかこれからも土浦めぐみ教会が主を覚え、主に覚えられている群れとして力強く歩んで行くことが出来ますように。

人を救い養われる神、私たちの主、めぐみ教会の主、
イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン

● 祝祷

土浦めぐみ教会の主、イエス・キリストの恵み
御翼の陰で養ってくださる神の愛
ひとときも忘れることなく導きたもう聖霊の導きが
教会創立72周年を喜び祝う一人一人の上に
また土浦めぐみ教会の上に
豊かに限りなくありますように。アーメン